

チンパンジーの仔の成長に伴う群れの変化について

○橋本雅子¹⁾，藤岡隆二¹⁾

(¹⁾ 横浜市立野毛山動物園)

野毛山動物園では、1966年に野生由来のチンパンジーオス、メスの幼獣各1頭を導入し2頭で飼育していたが(寄贈個体や短期間の飼育個体延べ9頭を除く)、2001年にオス1頭が死亡している。以降、翌年までは、メスの単頭飼育であった。その後、2002年に秋田市大森山動物園よりオス1頭、2008年に旭川市旭山動物園よりメス1頭の導入を経て、この2頭の間には6頭の出産があった。このうち成育したのは、2011年の2産目のメスと、2016年の6産目のオスであった。

2産目のメスは成長するにつれ、1966年に入園したメスの高齢個体の口の中から餌を奪うなどの行動が現れ、高齢個体への負担が大きくなり終日4頭の群れで過ごすことが困難となった。さらに、6歳を過ぎ思春期を迎えると親との関係に変化が生じ、親子ともに互いに距離を取り、同居を嫌うような行動が観察され始めた。この数か月後から、チンパンジーを飼育しながら同獣舎の大規模修繕工事が始まることが決定していた。工事により飼育空間が限られるなかで5頭を飼育するのは困難と判断したため、6歳9か月齢で搬出するに至った。チンパンジーの出産、仔の成長に伴った群れの変化について報告する。